



1つ1つを大事にすること

本間 大
もとまち皮膚科クリニック

足掛け 30 年ほど過ごした大学を離れ、昨夏から市内のクリニックで一臨床医として勤務しています。異なる環境に足を踏み入れ、自分が臨床医としてどこまでできるのか、日々患者さんに試されているようにも思います。また、大学では知らず知らずのうちに、いろいろな面で仲間が助けてくれていたのだなとつくづく感じます。

御多分に漏れず、母校の旭川医科大学の皮膚科学教室も常に人手不足で、私自身も皮膚腫瘍外来、アトピー性皮膚炎外来、褥瘡外来、乾癬外来と複数の専門外来を経験しました。また、爪甲矯正法など興味があった陥入爪や巻き爪の治療も継続していました。その意味では皮膚科一般を専門として過ごしてきましたので、なかなか 1 つの分野で専門家には到達できていませんが、これまで得た多種多様な経験は臨床医としてのスキルを高めるうえで非常に有用であったとともに、不十分でもいろいろな分野をかじることで、それぞれの担当者の動きや心情を実体験として共有できたことは私の財産です。

旭川医科大学は道東・道北地方の医療をカバーすることを目的に開学されました。北海道のおおよそ半分を占めるこの地域は、道内でも人口密度が非常に低いエリアです。地域の基幹病院では通常常勤医 2 名で診療を行います。病院間が 100 キロ以上離れており、インターネット環境が整う現在でも日常診療では常勤医の知識やスキルが大きな意味をもちます。私は基礎医学講座での大学院生活を修了後、すぐに日本最北に位置する地方病院に赴任しました。臨床のブランクがあり不安を抱えていましたが、先輩医師の“治療方針について自分以外の意見があることが大事だ”という一言が心に残っています。20 年以上前のエピソードではありますが、現在、クリニックでの診療を行う立場でその意味を再度考えているところです。クリニックでは基本的に自身の臨床能力が診療範囲を決定する

ことになり、検査やそのほかの設備による診療の限界も生じます。最近、皮膚科診療において分子標的薬など新しい薬剤の開発が進み、見かけ上は、皮膚科診療の細分化が進んでいるように思います。だからこそ、大学や基幹病院では自分の診療オプションを増やす意識が必要です。

自分が実際に診察した症例や学会などで発表した症例について、症例報告としてその都度まとめることも効率のよい方法の 1 つです。過去の報告には複数の診療オプションが存在しますし、症例報告には読者へのなんらかのメッセージが含まれます。自分で症例報告を執筆できるようになったら、後輩の症例報告執筆を手伝うことも多方面からの情報を収集するうえでたいへん勉強になります。また、日ごろ相談できる仲間がいる環境で、あえて苦手な分野の診療に取り組むこともよいと思います。同じことでも一人で始めることは案外むずかしいこともあります。きっといまいる環境でしかできないことがあるはずで

自身の能力を高めることは何より将来の自分への投資になります。ただ、医局の業務や院内の会議等、診療以外の仕事でも時間がとられ日々たいへんかとは思っています。私もこの 5 年ほどは、期せずして大学や病院の運営業務に携わることになりました。診療から一定の距離を置く形になりましたが、院内での皮膚科の立ち位置を客観的にみる機会を通じ、改めて皮膚科医としての院内貢献の方法について考えることができました。煩雑な業務でも、見方を変えると将来の自身に役立つことが少なからず含まれているかもしれません。

臨床医として自身を確立するためには、よい仲間とともに、いかに自身の臨床力を鍛えるかが重要です。月並みではありますが、日々の 1 つ 1 つを大事にすることが、将来の自分にとって何より重要であることを実感する日々です。これからも日々その意識を忘れずに、皮膚科医生活を楽しみたいと思います。